

報 告

現代美術の可能性－手をめぐって

吉原 美恵子

Possibility of Contemporary Art in Lifelong Learning

Mieko YOSHIHARA

概 要

「生きてきた時間」は、身体に刻まれている。とりわけ、「手」はその人が生きてきたさまをよく物語る、饒舌な部分だ。その「手」に注目して、現代の美術家たちの表現を観てゆくと、鑑賞者は自らが過ごしてきた時間と照らし合わせながら、作品を味わうことができ、自分の手に刻まれた傷や皺などが増えれば増えるほど、鑑賞体験はより豊かなものになるように思われる。

1. はじめに

生涯学習の場で、美術および現代美術は、いわゆる一般市民にとっての「総合学習」として機能するのではないかと考えている。いうまでもなく、美術表現は社会に根ざしている。あからさまに時代や社会を顕わにする作品もあるが、そうでなくとも、その作品の時空における存在や位置を認識することで、作品を正しく理解し、ときに共感を抱けることだろう。まだ若く、経験も浅く、若い時期には見えなかったもの、考えが及ばなかったこと、その価値が十分に判らなかつたものが、長い時間とさまざまな経験を経て、ひろく、深く、理解し、味わえることにより楽しめるという点で、とりわけ中高年層に美術鑑賞を薦めたい。ここでは、これまでに一般向けに行ってきた現代美術の普及活動を通じて、知見や経験が有効に作用した作品鑑賞について報告しておきたいと思う。

2. 手に積もる時間－石内都

1975年より、独学で写真を撮り始めた石内都(1947-)は、1976年には第4回「木村伊兵衛賞」を受賞している。1953年から十余年を過ごした横須賀の街を撮影した作品集が評判を呼んだ。荒れた粒子が、傷ついた街のさまや石内自身の心をよく表していた。デビューしてまもなくの周りからの注目の後、石内は長いスランプに陥ることになる。

40歳を迎えたとき、石内は突如、同世代の女性たちの手足を撮影し始めた。手と足だけの撮影だったが、モデルたちのカメラの前で足の裏を晒すことへのためらいや、秘められた過去をのぞき

見るような撮影時の緊張感は、新しい表現の可能性への予兆を石内に感じさせたに違いない。石内は、人の身体の末端には、繕いようもない、その人が生きてきた年月が刻まれているのだと確信した。そして、石内の興味は人の身体へと移っていった。その後、人の皮膚に残された、時間の痕跡とでもいべき「傷」を撮った作品群は、この作家のライフワークとなり、人が生きてゆくことに対する真摯なまなざしは、観る者に深い感動を呼び起こし、「傷」は石内の代表的なシリーズとなった。

徳島県立近代美術館が所蔵している石内の作品は、彼女の制作の流れの中で、とても繊細で微妙な揺らぎのなかにある作品である。＜「25 MAR 1916」# 1＞から＜「25 MAR 1916」# 13＞までの13点の作品群（2000年）は、すべて石内の母親の身体を撮影したものである。老齢になってからの裸身をカメラの前にさらけ出した作品は、大きなサイズと小さなサイズとから成り立っている。小さなサイズの作品には、老婆の手や足が撮影されている。年老いて皺だらけの手や足は、もはや男女の区別さえも簡単にはさせてくれない。大きなサイズには、抽象的な模様のような、別惑星の地表のような、不思議なイメージが写し出されている。これは、年老いてから大やけどを負った石内の母親の身体に刻まれた傷である。そして、この作品を撮影してほどなく、母親は逝去した。

確執のあった母子だったという。母の死をどのように受け止めて、心の整理をすればよいのかと石内は立ち止まった。そして、ふと母親の遺品に目を留めると、それはまさに母親の手の触れたものたち、母親の身体の延長線上にあるものたちだった。石内は母親の遺品を撮影し始める。これが次の大きな頂きに連なってゆく。遺品の作品群に目を留めた出版社から石内は、広島原爆資料館に収蔵されている遺品の撮影を依頼された。初めてヒロシマに向き合った石内は、カタカナで記されてきた傷ついた街「ヒロシマ」を、平仮名の「ひろしま」として提示したのだが、これがまたいかにも石内らしいスタイルだった。戦時下に人が身につけていたものへの愛おしさを画面に大きく定着させた。原爆資料館の遺品たちは、作品の中で堂々とその美しさを誇り、観る者に新鮮な驚きをもたらしたのだ。先の戦争の悲惨な状況下で、なんと人は日々丁寧に装っていたのだろうか、と。「女だから」という声がまたしても耳に届いたが、石内は「『女だから』と言われたっていい。私は『女だから』この写真が撮れたのだ」と言っただけだ。

独学で習得した写真技術と35mmのフィルムで手持ち撮影をするスタイルで、石内は作家人生にいくつもの制作のピーク（頂点）を積み重ねてきた。見事とっていい。

基地を抱えた横須賀の街、中年を迎えた女たちの手や足、身体に深く刻まれた傷跡、そして人の遺品へと流れるように制作を続けて来た。石内は、決して美しいものへ目を向けてきたわけではない。しかし、その作品には、生き抜くことへの称賛がにじんでいる。そこに見いだすのは、生身の人の生きた証をまっすぐにとらえようとする作家の目であり、作家自身のひたむきな制作への意欲だった。作品を通じて、生きていることの尊さ、いのちのすばらしさを美術表現という世界言語にして、発信し続けているとっていい。これを受け止める鑑賞者たちには、その心身に負った傷の数だけ、多くの共感をよせることができるはずだ。

3. 手のなし得ること－森口ゆたか

2014年12月、インターコンチネンタルホテル大阪のチャペルでたった二日間だけ開催された森口ゆたか展には、幅広い年齢層の来訪者の姿があり、静かな祈りの場で作品世界に浸っていた。白いアーチに縁取られるように正面に据えられた大きな切り出しの庵治石がスクリーンとなり、森口ゆたか（1960-）の映像作品がゆっくりと映し出されていた。2011年に徳島県立近代美術館で開催された「森口ゆたか－あなたの心に手をさしのべて」展（に出品された三つの作品〈touch〉（2007年）、〈光の刻〉（2009年）、〈HUG〉（2010年）をリメイクして創った作品だ。融合させて、文字を添えた。これは、この祈りの場所ゆえのコミュニケーションの手段なのだろうか。「うまれる」、「育てる」、「見守る」、「伝える」、「愛する」、「分かれる」、「抱きしめる」、「ゆるす」、「のこす」・・・A 1明朝体の優しく、美しい文字が、あたかも遠いところから届けられた便りのように、次々とスクリーンから人々の網膜に投影されてゆく。作品に向き合うそれぞれの人生の上に、これらの言葉が雪片のように舞い降り、まさに、観る者の心にそっと手を触れてゆく。

人の手がなし得ることは数え切れないほどたくさんあるが、森口は其中でも、最もシンプルで美しい行為を観る者に示している。〈HUG〉は、その極まりの作品である。「育てる」、「伝える」、「のこす」の言葉が心の奥深いところで共鳴するには、観る者にいくらかの時間と経験が必要なのではないだろうか。

4. 手の劇場－かなもりゆうこ

「思考を手助けする」、「繊細な表面を持つ」、「数え、計測する」、「言葉の弾みを助け、リズムをつくる」、このような働きをするものはなんだろうか。ある講座の最初に問い掛けた。受講者たちの年齢は決して低くない。自分がこれまでに経験してきたことを思い出して、それぞれが考え抜いた。答えは一つではないかもしれないけれど、ここで準備していた答えは「手」であった。

人間の身体の中でも、とりわけ雄弁なのが顔と手ではないだろうか。末端の神経は細かく張り巡らされ、とても敏感であることから、細やかな表情を創り出し、他に示すことができる。かなもりゆうこ（1968-）は、このあたりのことを熟知している。彼女が2013年に制作した〈手の物語〉という映像作品を観ると、私たちの暮らしや文化と手との深い結びつきを改めて認めることになる。手は、まさに世の中を「知る」ためのもので、様々な学問に繋がっている。時空の概念に単位をつくることができ、自然に存在しなかったものや、実利から離れたかたちをつくることができる。このようにして、人が生み出した芸術の世界もまた、手によって成立しているということを明らかにする。

かなもりは、脳が増えてゆく皺のように、足の裏に増えてゆく皺を想い、制作する。歩くことは考えることであるということ、歩きながら出会う「こと」や「もの」から、人は学び、成長するということへの信念を感じさせる。そして、それをかたちあるもの、手渡して遺せるものとするために、雄弁でありつつ繊細な手は、現代社会という大きな劇場の中で時代を紡いでいるのだと語っているように思われる。美しい映像と繊細な動きのパフォーマーたちは、その身体表現により、観る者の

すべての経験や知識を総動員させて、作品に対峙させる。しなやかな美しさを以て。かなもりゆうこの作品は、その前に佇む人々を静かにその世界に引き込みながら、人々の心や頭の中に、その印象を深い皺のように確かに刻み込んでいる。

5. 分岐点に立つときー津田亜紀子

バブル崩壊後、若い世代の進路の選択に、この国の経済の状況が暗い影を落としていた。とりわけ、将来の就業を考えての美術や芸術の学科への進学のためらいと教育費の工面が続かないことで、この国は芸術分野への若者の意欲や才能をどれほど失ったことが計り知れない。

ある作家は、長崎県の高校を卒業して上京し、予備校に通いながら、東京芸術大学を目指した。彫刻科のクラスが和気藹々と作業している様子や上野の西洋美術館の屋外に設置されていたロダンの彫刻を見て、彫刻の面白さと可能性を信じるようになり、彫刻を専攻した。自分の将来を具体的に予想できるような状況ではなかったけれど、彫刻を続けてゆくことだけは確信していたと言う。彫刻を創り続け、アルバイトをし、他にはすることもなく本ばかり読んでいた若い日々。優れた現代作家としての土壌を養う日々でもあっただろう。

学業を修了してから最初の個展までの日々を黙々と制作に充て、自らの作品をきちんと説明できるように周到に準備した。そして、初個展で世に問うた作品は、鮮烈な印象を残し、人々の記憶に深く刻まれた。「本当にこの若者の初個展か」と観る人を驚かせたデビューであった。ゴブラン織りの生地を樹脂で固めて、等身大の人のかたち成型し、自立させた。〈繰り返される模様〉（1999年 徳島県立近代美術館所蔵）と題された彫刻は、「立つこと」という彫刻の本質に迫る大きな課題と正面から向き合っている。そして、これから歩むべき道を見据えているかのような視線、地に立つ二本の足、そしてつよく握りしめた拳により命を得た。繰り返されているのは、織物の模様だけではない。コピーを繰り返すことで保たれる私たちの身体や忘れずに繰り返される季節のうつろいをも示唆する。

さて、人生の中で、私たちは多かれ少なかれ、選択を迫られる時がある。自分のこれまでに続く、行くべき道を選ぶときの不安なさまは、経験した者でなければ充分には理解し得ないものであるだろう。そして、決断のとき……。津田亜紀子（1969-）は、その拳を強く握りしめたに違いない。時を経て、津田が生み出した作品は未だ瑞々しく、蒼く、若々しい。作家の意図を越えた要素がみっしりと詰まっている。人が生きている時間、思い、意識など、ゆたかで広く、深い内容が、その手の中に握りしめられている。

幾つもの選択によって人は今を生きているのだが、これまでの人生の分岐点で数多くの選択を経験してきた者には、とりわけ作品鑑賞の深い味わいをもたらす作品であるだろう。

6. おわりに

気づかれただろうか。ここで述べてきたのは、すべて女性美術家たちの仕事についてである。そ

して、彼女たちは「創作」という、未だかつて誰も見なかったものを表現によって誕生させるという苛酷な仕事を以て、社会の中にその存在意義を認めさせてきた。美術家という、いわばマイノリティの仕事を、明らかで確かなものにしてきた。この報告のもう一つのテーマは、そんなダブルマイノリティである女性アーティストたちによる、自分たちが生きている現代のとらえ方、留め方を示すことでもある。弱い者、小さな者の声を聴くことはそれほど簡単なことではない。だが、男性中心に紡がれてきた美術の歴史が、マイノリティの視点を携えてより豊かなものを目指して、現在進行形で舵を切ろうとしている。そのような状況やその意義、意味は熟年層にこそ深く理解されることだろう。

現代美術は、これまで研究が蓄積されてきた美術史に連なるものであり、今、この時点でも紡がれているものなのだが、現代史と同じく、同時代に生きる人として、自らが立ち会っているという意識に乏しい。あるいは、新しく世に問われた作品に触れる機会が本当に少ないことから、身近なものだとは思われにくいようだ。「現代美術」を表す“Contemporary Art”という語は、まさに「同時代の美術」であるが、自らが生き抜き、体験してきた数十年の現代史を踏まえた上で眺め渡す現代社会は、同時代の作品鑑賞のための、豊かで懐の深い思考の庭となる。

Abstract

Contemporary Art can work effectively on people in the place of Lifelong learning, especially for senior people. Because they used to be rich in their knowledge, experience, so they have ideal background for understanding Contemporary Art. In this report, I took up “Hands” as the subject, because the end can declare the time.